高知女子大学看護学会誌　VOL.41, NO. 2 , pp60～69　2016

原著論文

退院調整看護師による病棟看護師の実践能力向上へのかかわり
－退院支援における状況の認識・働きかけに焦点を当てて－

Discharge Coordination Nurse's Involvement for improving practice ability of Ward Nurses
－Focused on the Situation Recognition and Approach in Discharge Arrangement－

山　本　詩　帆（Shiho Yamamoto）*　　森　下　安　子（Yasuko Morishita）**

要　　約

退院調整看護師による病棟看護師の実践能力向上へのかかわりの内容を明らかにすることを目的に、退院調整看護師９名に半構成面接法を用いてデータ収集を行い、質的帰納的に分析した。

退院調整看護師のかかわりには“状況の認識”と“働きかけ”があり、“状況の認識”には、【病棟看護師の退院支援を展開する力】【病棟看護師の患者・家族の生活や意向に沿った退院支援に取り組む意識】【退院支援における病棟業務やスタッフの状況】【病棟看護師の抱える退院支援の課題の複雑さ】【病棟看護師・病棟の変化】が、“働きかけ”には、【病棟看護師の退院支援を展開する力を高める】【病棟看護師が退院支援の中心の役割を担う意識を高める】【病棟看護師を後方から支援する】【病棟チームとして退院支援に取り組む意識を高める】【院内外のスタッフ間で必要不可欠な情報を確実につなぐ】【院内外のスタッフ間の合意を形成する】が抽出された。

退院調整看護師は、病棟看護師の気づきや主体性を引き出しながら退院支援の実践能力を高め、看護管理者も含め病棟全体がチームとして動き、合意形成できるよう働きかけることが重要である。

Abstract

The aim of this study was to shed light on the involvements of DCN (discharge coordination nurse) for improving practice ability of ward nurses. Qualitative inductive analysis was applied to data collected by semi-structured interviews with 9 discharge coordination nurses.

Involvements of DCN were generally recognized that it includes “situation recognition” and “approach”. The result represents the following categories as “situation recognition” : ability of ward nurses to develop discharge arrangement, ward nurses' consciousness about lives and wishes of Pt/family, condition of word work and staffs, complexity of discharge arrangement, changing of ward nurses and ward condition. The result also represents the following categories as “approach” : improving the ability of ward nurses to develop discharge arrangement, raising ward nurses' consciousness that playing a role in the center of discharge arrangement, supporting ward nurses by rear, raising consciousness that doing discharge arrangement as team members, supporting communication between hospital and community staffs for sharing recognition, reaching mutual agreement between hospital and community staffs .

Consequently, involvement of DCN were important for improving ability of ward nurses' discharge arrangement through leading detection and independence, working ward staffs as a team including nursing administrators and supporting reaching mutual agreement.

キーワード：退院調整看護師　病棟看護師　退院支援　かかわり

*社会医療法人近森会　近森病院　　**高知県立大学看護学部

Ⅰ．は　じ　め　に

わが国は、超高齢化社会へと変化しており、現在の病床を有効に活用していかなければ、この変化に対応することは困難である[1)]。また、疾病構造の変化から、退院後も自宅や地域で疾病や障害を抱えつつ生活を送る者が今後も増加していくと考えられ、入院初期から退院後の生活を見据えた退院支援の重要性が高まっている[2)]。

このような問題に対応するために、1994年に初めて退院調整看護婦が誕生し[3)]、その後、医療制度改革により在宅医療の充実を図ることが明記されたことにより、退院調整看護師は増加の一途をたどっている[1)]。しかし反面、永田[4)]は、病棟看護師が退院調整部署に任せ切りになり、かえって退院支援の質が低下したというケースもあることを指摘している。

退院支援は患者・家族が主体的に関わり、満足することができ、かつ医療者側にとっても効率的なものでなければならない[5)]。そのためには、森山ら[6)]は「入院した時点で患者・家族の状況、意思、希望を聴取し、医療者側の方向性とも照らし合わせて、入院時より退院後のことを見据えて患者・家族、医療者ともに納得するような退院を進めていく」必要があると述べている。本来、退院支援は特別なものではなく、日々の看護ケアの中で行われるものであり、退院支援の中心は病棟看護師である[7)]が、病棟看護師にとって、膨大で煩雑な業務の中で短期間に患者の生活を捉えてアプローチすることは、難易度の高い技術といえる[8)]。

以上より退院調整看護師は、質の高い退院支援を病院内のシステムとして構築し、病棟看護師がそのシステムの一員として活動できるようにかかわっていく必要があり、退院支援の中心である病棟看護師の退院支援の実践能力が向上することが退院支援の成功につながると考えられる。しかし、退院調整看護師の研究は数自体も少なく、退院調整看護師が病棟看護師の実践能力向上にむけてどのようなかかわりをしているのかについては明らかにされていない。

Ⅱ．研　究　目　的

本研究の目的は、退院調整看護師が病棟看護師の実践能力向上にむけてどのようなかかわりを行っているかを明らかにすることである。

Ⅲ．研　究　方　法

１．研究デザイン

退院調整看護師が実践している事実に根ざしたデータから内容を抽出し、記述していくことが必要であるため、質的帰納的アプローチによる因子探索型研究デザインを用いることとした。

２．用語の定義

退院調整看護師による病棟看護師の実践能力向上へのかかわり：退院調整看護師が患者・家族の満足する退院および病院の退院支援システムの機能の向上のために行う、病棟看護師の退院支援の実践能力の向上にむけた取り組みのすべて。それらは、退院調整看護師の姿勢を基盤とし、状況の認識と働きかけの相互作用からなる。

３．研究対象者

まず、地域で退院支援・調整のネットワーク活動を行っている看護職から、在宅移行を推進している施設の紹介を受けた。そして、その施設の責任者より推薦された退院調整部署に所属する退院調整看護師で、病院での退院支援に５年以上関わった経験があり、本研究の主旨を理解し研究への同意が得られた者を研究対象者とした。

４．データ収集期間・方法

データ収集期間は、平成25年７月～10月であった。データ収集は本研究の主旨に基づき半構成インタビューガイドを作成し、病棟看護師へのかかわりに関して自由に語ってもらえるよう、60～90分程度の面接を行い、面接内容は同意を得て録音及び記述した。

５．データ分析方法

録音した面接内容から逐語録を作成し繰り返し読むことで全体の流れをつかみ、得られたデータから退院調整看護師の病棟看護師へのかかわりに関する内容を事例ごとに抽出しコード化し、類似した意味を持つコードをまとめカテゴリー化した。データ分析は信頼性・妥当性を高めるため、在宅看護領域の研究者から継続的な指導を受けた。

6．倫理的配慮

高知県立大学看護学研究倫理審査委員会の承認を受け、施設責任者および対象者に研究の主旨、参加の自由、不利益事項、個人情報の保護などについて説明し同意を得た。得られたデータは個人が特定されないように処理し、面接内容を録音したICレコーダー・逐語録は施錠できる場所で研究者が厳重に保管・管理した。

Ⅳ．結　　果

1．対象者の概要

6都道府県の8か所の急性期病院と1カ所の慢性期病院に勤務する退院調整看護師9名であり、臨床経験の平均年数は19.1年、退院調整部署での退院調整看護師経験の平均年数は6.2年、病院の規模は400床以上が6施設、200床以下が3施設、各病院の退院調整看護師配置数は1～4名であった。

2．退院調整看護師による“状況の認識”

退院調整看護師による“状況の認識”では、【病棟看護師の退院支援を展開する力】【病棟看護師の患者・家族の生活や意向に沿った退院支援に取り組む意識】【退院支援における病棟業務やスタッフの状況】【病棟看護師の抱える退院支援の課題の複雑さ】【病棟看護師・病棟の変化】の5つのカテゴリーが明らかになった。

本稿では、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを《》、対象者の語りを「」で示す。

表1　退院調整看護師による“状況の認識”

カテゴリー	サブカテゴリー
病棟看護師の退院支援を展開する力	病棟看護師の退院後も継続する課題に結びつける力
	病棟看護師の正確に情報を伝え意見をすり合わせる力
	病棟看護師の患者・家族の退院後の療養方法や療養場所の意思決定支援ができる力
	病棟看護師の在宅でも継続可能な方法にケアを変更する力
	病棟看護師の在宅サービスの必要性をアセスメントする力
	病棟看護師の在宅側のスタッフとともに退院後のケアについて話し合いの場を進行する力
	病棟看護師の退院支援の適切な時期に退院調整看護師を巻き込む力
病棟看護師の患者・家族の生活や意向に沿った退院支援に取り組む意識	病棟看護師の生活の視点を持って患者の課題に取り組む意識
	病棟看護師の患者・家族の意向を重視することへの意識
退院支援における病棟業務やスタッフの状況	病棟スタッフの病棟チームで退院支援に取り組む意識
	病棟スタッフの院内外の多職種のスタッフと関わる機会
	退院支援における病棟スタッフの忙しさ
	病棟スタッフの関係性
	病棟内で退院支援を実践する力を持つ病棟看護師の存在
	病棟管理者の退院支援の重要性への認識
	病棟管理者の患者や病棟看護師の状況を踏まえて退院支援の展開を支える力
病棟看護師の抱える退院支援の課題の複雑さ	患者の身体的状況からの退院支援のタイミング
	患者・家族の退院に向けた思いの変化
	退院支援における医療的なコーディネイトや関係機関との調整の複雑さ
病棟看護師・病棟の変化	病棟看護師の看護実践の変化
	病棟管理者と共に行う病棟看護師の退院支援への取り組みの変化

１）【病棟看護師の退院支援を展開する力】

【病棟看護師の退院支援を展開する力】とは、病棟看護師の退院支援プロセスの各段階において必要とされる退院支援を展開する力である。これには７つのサブカテゴリーがあり、例えば《病棟看護師の退院後も継続する課題に結びつける力》では「段差が多いとか、トイレまでどれぐらいあるかなとか、こういう行動ができればいいんじゃないかっていうのはだいたいつかめていた」のように、課題のアセスメントに必要な自宅環境の情報を収集する力を認識していた。

２）【病棟看護師の患者・家族の生活や意向に沿った退院支援に取り組む意識】

【病棟看護師の患者・家族の生活や意向に沿った退院支援に取り組む意識】とは、病棟看護師の患者・家族の退院後の生活、今後の方向性に対する意向や生き方を踏まえて退院支援に取り組む意識である。これには２つのサブカテゴリーがあり、例えば《病棟看護師の生活の視点を持って患者の課題に取り組む意識》では「病棟って、今やってることをそのまま家に持ち帰るって頭なので、インスリンこの人、血糖測定４回してて、先生からも継続って言われたので継続なんです、って」のように、患者の退院後の生活に合わせた医療処置方法を検討しようという意識を認識していた。

３）【退院支援における病棟業務やスタッフの状況】

【退院支援における病棟業務やスタッフの状況】とは、退院支援を行うための土台となる病棟スタッフの状況 や病棟が持つ業務的な特徴である。これには７つのサブカテゴリーがあり、例えば《病棟管理者の患者や病棟看護師の状況を踏まえて退院支援の展開を支える力》では「師長さんもその子が不安な子だったんで、私がいっしょにやるからって言って」のように、病棟管理者の、病棟看護師の持つ力を見極めながら退院支援の展開をサポートする力を認識していた。

４）【病棟看護師の抱える退院支援の課題の複雑さ】

【病棟看護師の抱える退院支援の課題の複雑さ】とは、患者の身体的状況、患者・家族の意思、調整すべき課題から生じる退院支援の複雑さである。これには３つのサブカテゴリーがあり、例えば《退院支援における医療的なコーディネイトや関係機関との調整の複雑さ》では「ポートを入れたり経管栄養とか・・材料のコーディネイトだったり、薬局との間に入って交渉するのは私たちがやるんですけど、なかなかね、難しいので」のように、医療処置や材料のコーディネイト、関係職種との交渉の複雑さを認識していた。

５）【病棟看護師・病棟の変化】

【病棟看護師・病棟の変化】とは、退院調整看護師のかかわりに対する病棟看護師の看護実践や日頃の退院支援への取り組みの変化である。これには２つのサブカテゴリーがあり、例えば《病棟看護師の看護実践の変化》では「今だったら経口だけでいけるのにとか、最近活気が上がってきたからとか、そういうような観察っていうかね、そういうのをよくするようになりました」のように、患者の能力や変化に対するアセスメント力が変化したことを認識していた。

３．退院調整看護師による“働きかけ”

退院調整看護師による“働きかけ”では、【病棟看護師の退院支援を展開する力を高める】【病棟看護師が退院支援の中心の役割を担う意識を高める】【病棟看護師を後方から支援する】【病棟チームとして退院支援に取り組む意識を高める】【院内外のスタッフ間で必要不可欠な情報を確実につなぐ】【院内外のスタッフ間の合意を形成する】の６つのカテゴリーが明らかになった。

表２　退院調整看護師による“働きかけ”

カテゴリー	サブカテゴリー
病棟看護師の退院支援を展開する力を高める	生活の視点が持てるように患者の在宅生活のイメージを具体化する
	患者の課題やアセスメントの視点に気づくように質問する
	退院調整看護師の視点を伝え病棟看護師と共に考え行動する
	退院調整看護師がモデルとなり場面を見せる
	次の退院支援の展開に活かせるように、できていることとできていないことを伝える
	今後の方向性やアセスメントの視点が広がるように退院調整看護師の考えを提案する
	在宅側のスタッフから生活の視点を学ぶ機会を提供する
	次の退院支援の展開に活かせるように活動を共に振り返る
病棟看護師が退院支援の中心の役割を担う意識を高める	患者・家族への具体的なケア内容を示し病棟看護師の役割を意識させる
	病棟看護師中心に看護実践を展開する機会をつくる
	病棟看護師のできそうなことは任せ、見守る
病棟看護師を後方から支援する	患者・家族の生活と意向に関する情報を確認し、ずれないようにおぎなう
	病棟看護師と在宅側のスタッフとが円滑にコミュニケーションがとれるように間に入ってサポートする
病棟チームとして退院支援に取り組む意識を高める	退院支援の経過や課題を報告し病棟管理者を巻き込む
	看護スタッフ間で情報を共有し協力できる動きをつくる
	病棟内でリーダーとなる看護師の活動展開を促す
院内外のスタッフ間で必要不可欠な情報を確実につなぐ	他職種・他部門に必要な情報をずれなくつなぐ
	病棟看護師全体で共通認識すべき情報を伝え合う
	院内スタッフが必要な情報を効果的に共有できるように記録を工夫する
院内外のスタッフ間の合意を形成する	院内外のスタッフ間で患者の方向性について意見をすりあわせる機会をつくる
	院内スタッフ間の患者の方向性に対する意見のずれに直接調整に入る

1）【病棟看護師の退院支援を展開する力を高める】

【病棟看護師の退院支援を展開する力を高める】とは、病棟看護師が、退院支援における自分たちの役割を遂行するために必要な退院支援を展開する力を高めることである。これには８つのサブカテゴリーがあり、例えば《患者の課題やアセスメントの視点に気づくように質問する》では、「情報だけ羅列するんですけど、ここに出した意味は何ですかって聞いて、こんなことがあるからって言うので、そこが大事だって言って」のように、課題と結び付けて考えられるように病棟看護師が情報を出した理由を聞いていた。

2）【病棟看護師が退院支援の中心の役割を担う意識を高める】

【病棟看護師が退院支援の中心の役割を担う意識を高める】とは、病棟看護師が、患者にかかわるという退院支援の中心の役割を担う意識を高めることである。これには３つのサブカテゴリーがあり、例えば《患者・家族への具体的なケア内容を示し病棟看護師の役割を意識させる》では「患者さんや家族の意向ってどうなのかなっていうような所は、聞いてほしいっていうことはよく言いますね」のように患者・家族の今後の方向性に対する意向を確認するように伝えていた。

3）【病棟看護師を後方から支援する】

【病棟看護師を後方から支援する】とは、病棟看護師の退院支援の展開をおぎなったり、サポートすることである。これには２つのサブカテゴリーがあり、例えば《病棟看護師と在宅側のスタッフとが円滑にコミュニケーションがとれるように間

に入ってサポートする》では「訪看さんは、別にそこまで求めてるわけじゃないよって言ったら、看護師さん安心するだろうし、そういう意味での双方知っているものとしての仲介として」のように在宅側のスタッフと病棟看護師が正確に情報共有できるように間に入って説明していた。

４）【病棟チームとして退院支援に取り組む意識を高める】

【病棟チームとして退院支援に取り組む意識を高める】とは、病棟全体が一つのチームとなり、退院支援に取り組もうとする意識を高めることである。これには３つのサブカテゴリーがあり、例えば《看護スタッフ間で情報を共有し協力できる動きをつくる》では「上の看護師は必ず出てねと言いました、プライマリ一人だと、その子に責任がかかる大きな決定の会議だったので。先輩がフォローしていっしょに病棟でかかわっていくことで、病棟の力が上がるし、病棟で解決してほしいから、やっぱりプライマリをフォローできるような体制を取ってほしいので」のように、病棟看護師同士でフォロー出来る体制を作っていた。

５）【院内外のスタッフ間で必要不可欠な情報を確実につなぐ】

【院内外のスタッフ間で必要不可欠な情報を確実につなぐ】とは、退院支援に必要不可欠な情報を院内外のスタッフ間で共有できるように確実につなぐことである。これには３つのサブカテゴリーがあり、例えば《他職種・他部門に必要な情報をずれなくつなぐ》では「病棟看護師さんとPTさんのかかわりが、まだなかなか持ててない状況なので、結局私がPTさんと関わったことを病棟に伝えてっていうふうなことをしてる段階で、外との調整も含めて病棟に伝えて行くっていう形で」のように退院調整看護師が院内外の他職種や病棟看護師から得た情報を双方に伝えていた。

６）【院内外のスタッフ間の合意を形成する】

【院内外のスタッフ間の合意を形成する】とは、院内外のスタッフが納得する解決策に導くことである。これには２つのサブカテゴリーがあり、例えば《院内外のスタッフ間で患者の方向性について意見をすりあわせる機会をつくる》では「在宅側とのカンファレンスも開催しました。やっぱりチームで決めるっていうのが基本だからっていうことで、関わってきた人の中からは、いろんな意見が出るだろうし、みんなで今後の方向性を考えるっていうことで伝えましたね」のように退院調整看護師から在宅側とのカンファレンスの開催を提案し、意見をすり合わせる機会をつくっていた。

Ⅴ．考　　察

１．退院調整看護師による“状況の認識”の特徴

病棟看護師が退院支援において自分たちの役割を理解し、それを遂行するためには、退院支援のプロセスの各段階（第１～３段階）において必要な能力があると言われている[9)10)]。本研究の退院調整看護師は、各段階における【病棟看護師の退院支援を展開する力】を認識するとともに、【病棟看護師の患者・家族の生活や意向に沿った退院支援に取り組む意識】を認識していた。

山田[11)]は「退院支援・退院調整は、まさに患者・家族の思いに沿って退院後の生活の組み立てを行っていくということを手伝う、という継続看護そのものの仕事」と述べており、患者・家族の生活や意向を踏まえたかかわりは、退院支援の基本と言える。しかし、医療の提供と管理を日常の仕事としている病棟看護師にとって、患者・家族の生活を意識することは易しいことではない[12)]。本研究の退院調整看護師も、これらのことを理解した上で、病棟看護師の退院支援を展開する力だけでなく、退院支援において最も重要な患者・家族の生活や意向を重視しているかどうかを認識していると考えられた。

また、篠田[13)]は「退院支援は多職種協働によるチームアプローチ」であり「病院内のチームづくりと病棟と地域をつなぐシステムづくりでもある」と述べ、峰村ら[14)]は、「在宅療養支援に向けて看護体験を深め、発展させ、看護の質を向上させていこうとするときに、病棟管理者の意識のあり方が影響する」と述べている。一人の病棟看護師の能力には限界があり、退院支援は多職種の専門性を活かしたチームで行うものである。よって、本研究の退院調整看護師も、診療科や病棟によって異なる病棟業務の状況、病棟チームの退院支援に対する意識や関係性、退院支援を実践する力を持つ

看護師の存在、病棟管理者の意識や能力といった【退院支援における病棟業務やスタッフの状況】を認識していたと考える。

藤澤[15]は「病状の変化や治療方針の変更があり、退院支援を開始するタイミングを計りにくい」「病状変化に合わせて複数回、退院に向けたアセスメントを行う必要性がある」と述べ、平松ら[16]は患者・家族の「漠然とした不安は、退院支援を受ける過程で徐々に具体的な不安へと変化する」と述べている。刻々と変化する患者の身体的状況に合わせて退院支援のタイミングを見極めるとともに、揺れ動く患者・家族の決心や覚悟を認識することも重要と言える。また、様々な保険制度を活用しながら、患者の病状に合わせて多くの関係者と医療や介護についてコーディネイトする退院調整という業務を病棟の通常業務と並行して行うことは難しい場合がある[17]。よって、本研究の退院調整看護師も、退院支援のタイミング、患者・家族の思いの変化、関係機関との調整の複雑さといった【病棟看護師の抱える退院支援の課題の複雑さ】を認識していたと考える。

同じ病棟看護師にかかわる場合であっても、病棟業務やスタッフの状況、退院支援の課題の複雑さは時によって異なる。病棟看護師個々の状況だけでなく、病棟の状況を合わせて認識していることが特徴であり、その結果、病棟看護師による対応が可能かどうかを判断していると考えられた。

2．退院調整看護師による“働きかけ”の特徴

退院支援の中心は病棟看護師であり、病棟看護師が主体的に行動する必要性については多くの文献で述べられている[7)10)18)19)]。しかし宇都宮[20]は、病棟での状態から家に帰ったらを予測することが必要であるが、それをいきなり病棟看護師に求めるのは無理であり、まずは退院調整看護師がモデルになって尋ね方の見本を示したり、病棟看護師に質問することで看護師自身が考えられるようになると述べている。

本研究の退院調整看護師も、病棟看護師に対して、生活の視点をもち、自身で気づき、考え、決定し実行に移したり、実践を振り返ることができるよう【病棟看護師の退院支援を展開する力を高める】働きかけや、不足していたり苦手な部分に対してはサポートするといった【病棟看護師を後方から支援する】働きかけを行っていた。

このように患者・家族の一番近くにいる病棟看護師が患者・家族に真摯に向き合いかかわることで、より患者・家族の思いや生活を知ろうとする意識が高まると考える。そして、それをケアにつなげ実践する経験を積み重ねることが病棟看護師自身の力となり、【病棟看護師が退院支援の中心の役割を担う意識を高める】ことにつながっていると考えられる。

また、退院調整看護師は病棟において、病棟管理者を巻き込んだり、看護スタッフ同士で協力できる動きをつくる、退院支援のリーダーとなる看護師の活動展開を促すといった【病棟チームとして退院支援に取り組む意識を高める】働きかけや、スタッフ間で情報共有する場をつくる、間をつなぐといった【院内外のスタッフ間で必要不可欠な情報を確実につなぐ】働きかけを行っていた。そして、病棟チームの力で解決できるよう互いに意見をすり合わせる機会をつくったり、退院調整看護師としての立場や力が必要であると判断した場合には積極的にずれの調整を行うといった【院内外のスタッフ間の合意を形成する】働きかけを行っていた。

このように、本研究の退院調整看護師は病棟看護師個人への働きかけと同時に、病棟全体として退院支援に取り組む組織文化の醸成への働きかけを行っていた。谷垣ら[21]は、「病棟看護師一人ひとりが退院支援に取り組むのはもちろん、病棟全体として退院支援に取り組む雰囲気をつくることが必要であり、そのためには、病棟における組織文化の育成に責任を負う病棟師長の役割が大きい」と述べている。川上ら[22]は、退院支援委員およびリンクナースには、各部署における退院支援活動の実践およびロールモデルとしての役割があると述べている。また、三輪ら[23]は自身の研究の中で退院調整看護師が、「関係者全体の思いを把握するとともに、患者・家族のこれまでの生活から現在、そして看取りまでを見通した上で、その方向性を統一するという高度なアセスメント力とコミュニケーション技術が必要とされる調整者としての重要な役割を担っていた」としている。

退院調整看護師が病棟管理者を巻き込む働きかけを行っていたことは本研究で得られた新たな観点であり、さらに看護スタッフ同士をつなげ、リー

ダーとなる看護師の活動の場をひろげることは、病棟全体が一つのチームとなり退院支援に取り組む意識を高めることができる重要な働きかけであると言える。そして、チームで行う退院支援が円滑に進むためには、病棟看護師が情報共有しやすい環境をつくること、高度なアセスメントやコミュニケーション技術が必要な合意形成の場面には退院調整看護師が直接かかわることが必要であると考える。

３．退院調整看護師による病棟看護師の実践能力向上へのかかわりの全体像

退院支援において退院調整看護師は、個々の病棟看護師へのかかわりと病棟全体へのかかわりを行っており、これらは相互に影響しあっていると考えられた。 個々の病棟看護師へのかかわりにおいては、【病棟看護師の退院支援を展開する力】【病棟看護師の患者・家族の生活や意向に沿った退院支援に取り組む意識】の認識をもとに、働きかけの中心となるのは、【病棟看護師の退院支援を展開する力を高める】【病棟看護師が退院支援の中心の役割を担う意識を高める】働きかけであり、それを支えるものとして【病棟看護師を後方から支援する】働きかけがあると考えられた。病棟へのかかわりにおいては、【退院支援における病棟業務やスタッフの状況】【病棟看護師の抱える退院支援の課題の複雑さ】という病棟あるいは課題の状況を認識した上で、病棟看護師を、退院支援における病棟チームのメンバーと捉え、【病棟チームとして退院支援に取り組む意識を高める】働きかけを行い、それを支えるものとして 【院内外のスタッフ間で必要不可欠な情報を確実につなぐ】【院内外のスタッフ間の合意を形成する】働きかけを行っていた。それらの結果は【病棟看護師・病棟の変化】として認識し、次の働きかけへとつながっていくと考えられた。

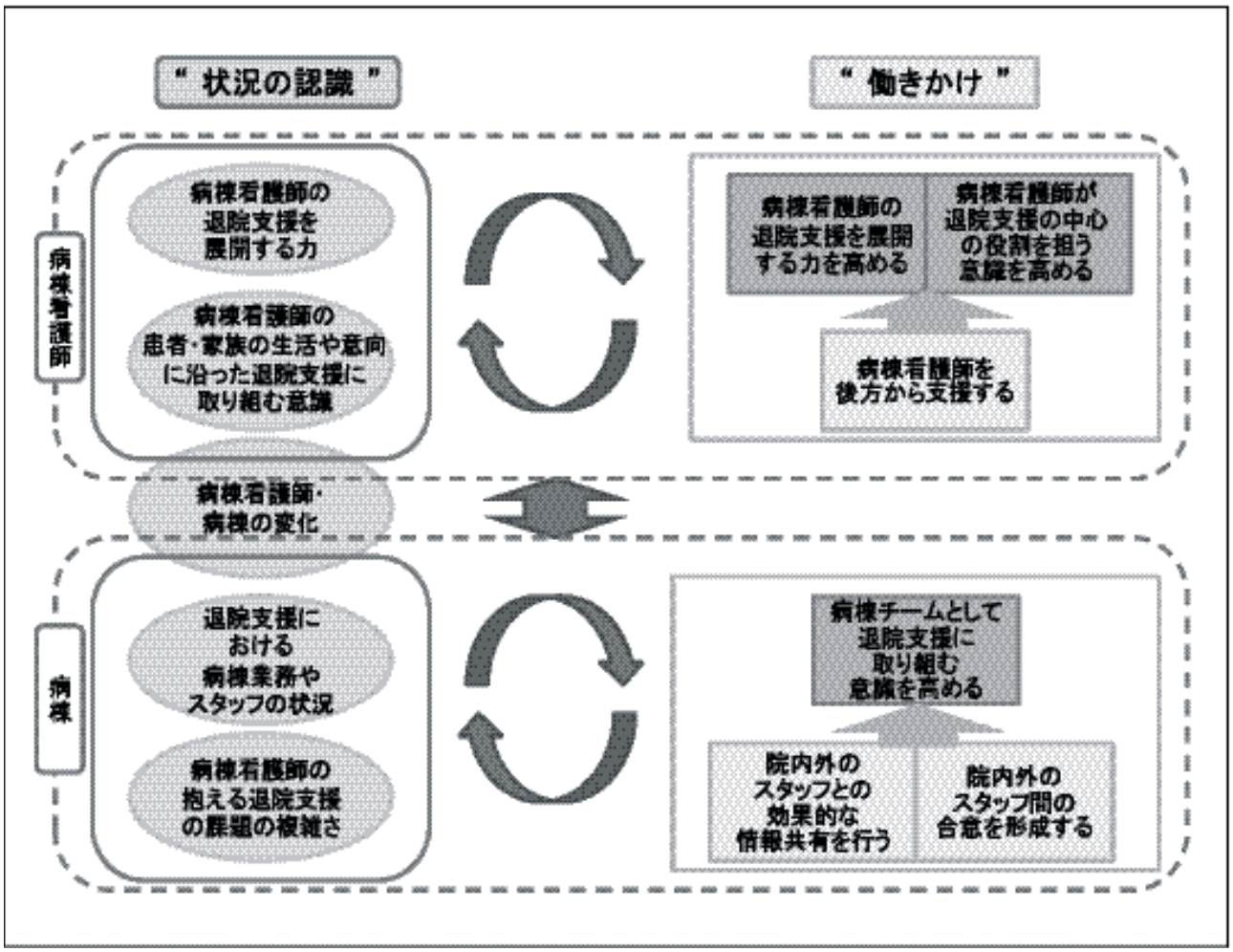

図１　退院調整看護師による病棟看護師の実践能力向上へのかかわりの全体像

Ⅵ. 看護への示唆

病棟看護師の退院支援の実践能力向上にむけて、退院調整看護師は病棟看護師、病棟、患者の状況を統合して認識し、病棟看護師が主体的にケアを考え、実践していく中で退院支援の役割意識を高め、実践能力を高めていく働きかけを行うこと、さらに、病棟全体の退院支援システムの向上に向けて、病棟管理者と協働し、病棟全体でチームとして取り組んでいけるよう働きかけることが重要である。そして、退院調整看護師は病棟看護師の気づきや主体性を引き出し、患者・家族の生活や意向に沿った退院支援の実践につなげていく教育力、看護管理者も含め病棟全体がチームとして動くチーム形成能力、合意形成能力を養っていく必要性があると考える。

Ⅶ. 研究の限界と今後の課題

かかわりの全体像の図の構造化について、“認識”した病棟看護師や病棟の状況、ケースの状況によって“働きかけ”の内容や組み合わせが変化するかどうか明らかにしていないこと、また、事例を通じた語りであるため、退院調整看護師が事例を介さなくても日頃から“認識”し“働きかけ”ていることがあるかどうか明らかになっていなこと、退院支援システムの構築に関するデータがあまり得られなかったことが本研究の限界である。

今後は対象者数を増やし、次の段階として研究を進めていく必要がある。

謝　辞

多忙な中、本研究にご協力いただきました研究協力者の皆様、諸先生方に心より感謝いたします。また、本稿は平成25年度高知県立大学大学院看護学研究科に提出した修士論文の一部を加筆訂正したものである。

＜引用・参考文献＞

1）山田雅子著（篠田道子編著）：ナースのための退院調整　院内チームと地域連携のシステムづくり　第１章 退院調整の基礎知識、第２版、日本看護協会出版会、2-32、2012.
2）厚生労働省：在宅医療・介護あんしん2012、http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou-iryou/iryou/zaitaku/dl/anshin2012.pdf, 2012.
3）倉田和枝：地域との接点でよりよい退院をめざす　退院調整看護婦の位置づけとはたらき、看護学雑誌、60(11)、999-1005、1996.
4）永田智子：退院支援とは何か、なぜ必要なのか、臨牀看護、36(1)、2-8、2010.
5）永田智子、村嶋幸代：退院支援の現状と課題、保健の科学、44(2)、95-99、2002.
6）森山美知子、岩本晋、芳原達也ほか：急性期疾患治療病院に退院調整専門看護婦を設置する効果の研究（その２）、病院管理、33(2)、23-31、1996.
7）鈴木樹美：退院支援における病棟ナースの役割、臨牀看護、36(1)、17-20、2010.
8）三輪恭子：病棟看護師と地域の看護師との連携－退院後の“生活”を支援するために－、コミュニティケア、13(1)、26-29、2011.
9）三輪恭子：退院支援のプロセスと多職種協働における病棟看護師の役割、看護技術、58(14)、4-10、2012.
10）宇都宮宏子著（宇都宮宏子・三輪恭子編）：これからの退院支援・退院調整　ジェネラリストナースがつなぐ外来・病棟・地域　第３章 退院支援・退院調整に必要な知識とスキル、日本看護協会出版会、123-193、2012.
11）山田雅子著（宇都宮宏子編）：病棟から始める退院支援・退院調整の実践事例　第１章 総論、日本看護協会出版会、1-46、2012.
12）宇都宮宏子：退院支援のプロセスを学ぼう、看護学雑誌、74(5)、6-28、2010.
13）篠田道子：退院支援システムの構築と退院調整看護師の役割、看護、60(11)、44-47、2008.
14）峰村淳子、吉田久美子、丸山美知子ほか：在宅支援の看護に関する病院看護師の認識・行動の実態、看護展望、33(4)、81-89、2008.
15）藤澤まこと：医療機関の退院支援の質向上に向けた看護のあり方に関する研究（第１部）－医療機関の看護職者が取り組む退院支援の課題の明確化－、岐阜県立看護大学紀要、12(1)、57-65、2012.
16）平松瑞子、中村裕美子：療養者とその家族の退院に関連する療養生活への不安、大阪府立

大学看護学部紀要、16(1)、9-19、2010.
17) 山田雅子：退院調整とその動向、保健の科学、52(4)、265-269、2010.
18) 原田かおる：病棟看護師が退院支援に取り組める体制づくりのコツ、看護学雑誌、72(10)、838-844、2008.
19) 三輪恭子：病棟看護師の退院支援を支えるコンサルテーション、Nursing Today、23(2)、42-46、2008.
20) 宇都宮宏子：退院支援・退院調整における院内の連携システムづくり、Nursing Today、27(5)、66-71、2012.
21) 谷垣静子、長江弘子、岡田麻里ほか：退院支援に取り組むスタッフをサポートする病棟師長の組織的な取り組み、看護展望、38(8)、84-87、2013.
22) 川上ゆり、村本多江子、宮下恵里ほか：急性期病院における退院支援システムの構築と退院支援に必要な看護師教育、看護展望、37(12)、25-33、2012.
23) 三輪恭子、岩瀬嘉壽子、宇都宮宏子ほか：退院調整看護師のがん終末期患者への退院支援のプロセスとその役割に関する研究、日本緩和医療学会学術大会プログラム・講演抄録集、15、198-202、2010.